

慈雲「教王経初品」における「還梵」の古典古代学的意義

著者	秋山 学
雑誌名	筑波大学地域研究
巻	40
ページ	35-52
発行年	2019-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2241/00155084

慈雲「教王經初品」における 「還梵」の古典古代学的意義

Significance of the “Reverse-translation into Sanskrit” from the Viewpoint of Classical Studies:
On the Basis of the “Commentary on the *Vajraśekhara-sūtra*: First Chapter” of Jiun (1718-1804)

秋山 学
AKIYAMA Manabu

Abstract

In 1803, Jiun (1718-1804) translated reversely into Sanskrit the first part of the *Vajraśekhara-sūtra*, which was once translated by Amoghavajira (705-774) into Classical Chinese from Sanskrit. The original text of this *sūtra* was later discovered, so we can reevaluate the essence of Jiun’s re-translation into Sanskrit. The characteristics of his translation can be summed up: with regard to the explanation of a word, Jiun follows the principle of “Sanskrit-word for Chinese-character translation”; as regards the arrangement of words, on the other hand, he keeps the Japanese word order in translation. Therefore, we can scarcely find any coincidence at the level of syntax between his translation and the original text of the *sūtra*, since Jiun had few precise knowledge of inflection and conjugation of Sanskrit. However, on the basis of his accurate acquaintance with the esoteric Buddhism, the technical terms adopted by Jiun regarding the Buddhist proper names and rituals were almost correct in his translation. It can be surmised that the principle of Jiun on the arrangement of words was based on the doctrine of the Uden-Shintoism, which was founded by Jiun himself. We may reappraise the value and principles of re-translation into Sanskrit by Jiun more in the future.

Key Words : Jiun, Reverse-translation into Sanskrit, *Vajraśekhara-sūtra*, Arrangement of words,
Uden-Shintoism

キーワード：慈雲、還梵、『金剛頂経』、語順、雲伝神道

1. 慈雲による「還梵」について

1. 慈雲尊者飲光（1718-1804年）

江戸時代の高僧・慈雲尊者飲光（1718-1804年）は、その最晩年の直筆本『法華陀羅尼略解』（1803年3月4日校了）が筑波大学附属中央図書館和装古書コーナー（ハ320-59）に所蔵されていることで知られるが、この著作が慈雲のものと確認されたのは2010年秋のことであり、それ

まで慈雲最晩年の著作とされていたのは、3月4日よりも校了が10日ほど遡る『理趣経講義』であった。この『理趣経講義』の校了は1803年2月24日であるが、正確に言えば、3巻より成るこの『理趣経講義』には補篇2編、すなわち「教王経初品」および「大日経第三悉地出現品」が付されている。頁数に換言するなら、『理趣経講義』全3巻は『慈雲尊者全集』の巻9下に収められており、「理趣経講義第一」は同巻247頁から287頁まで、「同第二」は288頁から350頁まで、「同第三」は351頁から363頁までに及ぶ。これに続き、364頁から377頁には「教王経初品」、378頁から381頁には「大日経第三悉地出現品」が掲載され、「享和三年二月二十四日校了」との日付はこの381頁に載るため、この日付は「大日経第三悉地出現品」の校了時に当たるということになる。

『理趣経講義』は、最晩年の慈雲が「還梵」、すなわち漢訳されたテキストからサンスクリット原文による仏典を再構成しようとする試みを展開した著作として名高い。昨今でこそ、チベット語学などの発展により「還梵」は珍しくなく、重要性も伴うようになったものの、意識を旨とする漢訳だけを基に「還梵」という営為にはそもそも無理があり、しかも時代は鎖国期の江戸時代であった。ただ全17段より成る『理趣経』に関して、『理趣経講義』の中で還梵作業がなされているのは第3段あたりまでについてと、末尾に収められ「善哉善哉大薩埵」に始まる「讚嘆」と呼ばれる部分についてに限られている。上に記したように、『理趣経講義』の中には、本来『理趣経』そのものとは別に扱われるべき『教王経』、すなわち不空(705-774年)の訳になる『金剛頂一切如来真实撰大乘现証大教王経』全3巻の初品への注疏、および善无畏(637-735年)の訳になる『大日経』すなわち『大毘盧遮那成仏神変加持経』全7巻のうちの「第三悉地出現品」への注疏が付されていて、これら「教王経初品」ならびに「大日経第三悉地出現品」に対しても「還梵」作業は行われている。このうち内容的に真言密教の根幹を成す部分と言え、まずもって「教王経初品」であることは疑いを容れない。またこの「教王経初品」に対する還梵に関して、慈雲は『理趣経』テキストに対する還梵よりも充実した作業を施している印象がある。そして物理的に言うなら、「大日経第三悉地出現品」はさておき、『法華陀羅尼略解』を除けば、「教王経初品」が慈雲による密教関係の最も晩年における著作ということになるだろう。

本稿は、慈雲によるこの「教王経初品」における還梵の実際に焦点を当て、その意味を考えてみようとする試みである。高見寛応師は『理趣経講義』の解説において「この講義3巻は経論を傍証して簡明に解説し、かつ第3巻の終わりに経ならびに訳の目録と、教主釈と教王経初品梵語と大日経悉地出現品梵語との4篇を付記している」(高見1964:186)と記している。この文からわかるように、「教王経初品」あるいは「大日経悉地出現品」の梵語テキストは、間違いなく慈雲の手になるものである。そうでなければ、慈雲がすでに手許に有していた梵文をそのまま筆録したということになるわけであるが、それらが「付記」とされることはないと思われるためである。

実際、『金剛頂経』すなわち『金剛頂一切如来真实撰大乘现証大教王経』の梵文テキストは、慈雲の時代以降に発見され、現在では堀内寛仁師による『梵蔵漢対照 初会金剛頂経の研究 梵本校訂篇』(堀内1973)が出版されて、その原典の実情が明らかになっている。慈雲が記してい

る梵文は、この『金剛頂経』梵文とは異なる。つまり慈雲は、「還梵」作業で名高い『理趣経講義』の中で『理趣経』に対したのと同様、この『金剛頂経』に対しても、86歳を刻んだ当時に至るまでに蓄積した自らの梵学に関するすべてを注ぎ込んで「還梵」作業を行い、『金剛頂経』の梵文原典を再建しようと試みたのであった。『金剛頂経』の梵文原典は、『理趣経』の梵典に比して、その所在が明らかになった後ではより人口に膾炙しており、慈雲の還梵作業の内実に関して、より究明を行いやすい。本稿でこの「教王経初品」を取り上げるのにはこのような理由も伴う。

2. 慈雲の『教王経』注疏

(1) 不空訳『金剛頂経瑜伽一八会指帰』

さて、やはり不空の漢訳になる『金剛頂経瑜伽十八会指帰』の冒頭は、次のように記されている。「金剛頂経瑜伽は十萬偈十八会あり。初会を一切如来眞實撰教王と名づく。四大品あり。一には金剛界と名づけ、二つには降三世と名づけ、三つには徧調伏と名づけ、四つには一切義成就と名づく。四智印を表するなり。初品中において、六曼荼羅あり。所謂、金剛界大曼荼羅并びに毘盧遮那仏受用身の説なり。五相をもって現に等正覚を成ず（五相とは、所謂通達本心、修菩提心、成金剛心、証金剛身、仏身円満、これ則ち五智通達なり）。成仏の後、金剛三摩地をもって、発生の三十七智を現じ、広く曼荼羅の儀則を説き、弟子の為に速証菩薩地、仏地の法を受く」（詳しくは秋山 2018b）。この中で、慈雲尊者が注疏を施しているのは「発生の三十七智を現じ」のうち、事実上第六智（金剛薩埵）の出生の部分までである。

(2) 「神楽岡次第」をめぐる

以下に翻刻する慈雲著『教王経初品』には、慈雲自身の手になる書き込みが認められるが、そこから、慈雲が用いた手引書として「神楽岡次第」あるいは略して「神次」と呼ばれるものがあつたということが判明する（2. 一切如来の住処 および 4. 五相成身観（3）成金剛心 を参照）。この次第は、「神楽岡貞慶」とよばれる洛東神楽岡の貞慶（866-900年頃；興福寺の貞慶とは別人）が、金剛頂宗の次第に関して著した『金剛界念誦（次第）私記』2巻および『金剛界略念誦私記』1巻のうち、前者すなわち『金剛界念誦私記』を指す。これは、真言の伝承に「廣澤・小野」すなわち「野澤」2派あるうち、小野派に属す安祥寺流（安流）、勸修寺流（勸流）、隨心院流（隨流）が用いてきた次第である。小野流は「小野根本六流」を基本とするが、このように「小野六流」とする場合、それは（狭義の）「小野三流」および「醍醐三流」に分かれ、上述の安流・勸流・隨流が前者三流を構成する。これらにあつては、範俊（1038-1112年）の頃まで延命院元杲（ケツゴウ；914-995年）の次第を用いていたが、嚴覚（1056-1121年）以来、この「神楽岡次第」次第を用いるようになったものである（梅尾 1982：543）。一方「醍醐三流」とは、三宝院流・理性院流・金剛王院流の3つを指す。

慈雲は、密教の法嫡の上では、これら醍醐三流の一つに属す三宝院流から分岐した松橋流に発する西大寺流に連なる（密教辞典編纂会 1931：189）。しかしながら慈雲は、律の面で長栄寺を拠点として西大寺・野中寺派から分岐し、結局高貴寺を総本山とする「正法律一派」を興すに至

る。慈雲は密教の法流に関しても、自らの典拠としうる次第を整えようと考えたものと思われる。

そもそも金剛界の行法の次第は、すべて不空訳による『金剛頂蓮華部心念誦儀軌』を本軌とする。しかしながら慈雲は、この『心念誦儀軌』を再録するのではなく、『心念誦儀軌』がさらに本経とするところの『金剛頂経』（『金剛頂一切如来真实撰大乘现証大教王经』）の漢訳文を還梵・梵語訳しつつ、そこに注釈を加えるという形をもって、一派が依拠すべき次第に整えたのである。

（3）「五相成身観」について

ところで、この「教王経初品」が注疏の主対象としているのは「五相成身観」である。これは、顕教に対する密教の精髓を明らかにする観法だと言える。以下、上田霊城師の解説を引くことにしよう。『三卷教王経』の所説によれば、一切義成就菩薩（釈迦菩薩）が6年の苦行の後、菩提樹下の金剛座上で金剛定に入ったとき、一切如来は受用身を示現してこの菩薩を驚覚する。一切如来の教導によって、一切義成就菩薩は自心を観察し（通達菩提心）、菩提心は月輪形であることを見（修菩提心）、月輪の中に五股金剛を見て自身を金剛のごとく堅固にしたところで（成菩提心）、一切如来によって金剛界灌頂を与えられて金剛身となり、金剛界菩薩と改名する（証金剛身）。次に金剛界菩薩は、相好威儀に一切の仏形を円満して自身の上に一切如来を現証する（仏身円満）。その時一切如来は、金剛界菩薩の身に悉く入り、一切如来と金剛界菩薩とは無二無別となる（諸仏加持）。これを金剛界如来と称する。五相成仏した金剛界如来は、色界頂に至って自心より37尊を出生して金剛界曼荼羅を建立する」（上田1997：389）。

また遠藤祐純師の解説によれば、この「五相成身観」の後、諸仏加持、五智円成、宝灌頂、四方如来の会座、五方如来出生、金剛薩埵出生、へと続いてゆく（遠藤1985：4）。これらの諸段階については、下掲の本文中に順次見出し語として注記することにする。先に不空の『十八会指帰』から内容の概略を示したが、慈雲は三十七尊（＝三十七智）の出生のうち、金剛薩埵の出生までを収めたということになる。

では以下、慈雲著『教王経初品』の翻刻を行う。梵字部分については、アルファベット化してある。掲載の順序としては、基本的に、①慈雲の梵訳、②『金剛頂経』に載る不空の漢訳（訓読書き下し文）、③堀内校訂本に基づく『金剛頂経』のサンスクリット原文、④『教王経初品』に載る慈雲の〈注記〉、⑤筆者による【注記】の順とした。慈雲による行注は〈〉で、割注の類は《》で順次該当箇所につす。以上5要素は、完備しているとは限らない。陀羅尼は、サンスクリット原本と慈雲本では基本的に一致しているため一括し、音写はその後に記した。翻刻に際しては、現在流布しているサンスクリット文法により訂正を施した部分も多いが、慈雲による原綴を残した部分もあり、一貫していない。もとより、慈雲が想起している梵語語彙が判明しない部分も多く、この点に関しては今後の課題としたい。

II. 慈雲著『教王經初品』翻刻

1. 智身大日の住处

・(慈雲) bhagavān <<修生始覺門>> mahā-bodhi-citta Samanta-bhadra mahā-bodhisatvam tirṣṭha. sarva-tathāgata hr̥daya. <<始覺門。轉識得智。妙觀察智>>

【漢訳】 婆伽梵<<自性身>>。大菩提心普賢大菩薩。一切如来の心に住みたまふ。

(堀内) bhagavān mahā-bodhi-cittaḥ Samanta-bhadro mahā-bodhisatvaḥ sarva-tathāgata-hr̥dayeṣu vijahāra.

【注記】 堀内本によるvijahāraはvi-√hr̥(取る)の完了形である。慈雲はこれを√sthā(立つ)の現在形に訳している。慈雲は固有名詞を含め、名詞を実に正確に当てている。ただ動詞の活用、および名詞の格変化に関して、彼の知識には大きな限界があった。

2. 一切如来の住处

・(慈雲) tatra khalu sarva-tathāgata paṇṇam ite buddha lokar dhātu tillopama

【漢訳】 時一切如来<<自受用身>>。此の仏世界<<實報土>>に満つること、猶ほ胡麻の如し。

(堀内) Atha sarva-tathāgatair idaṃ buddha-kṣetraṃ, tad yathā tilabimbam iva, paripūrṇam

<<行者金剛定に入らんと欲すれば<<第八識相應>>、先ず妙觀察智に住せよ<<第七識相應>>。まさに結跏趺坐して支節動揺せざるべし。まさに等持印を結ぶべし。二羽金剛縛して仰げて臍の下に安んじ、端身にして動揺せざれ。舌をば上脣に拄へ、息を止めて微細ならしめよ。この定に住すれば即ち如来の不動智を得>>或は伝に無量寿定印なり。唵。三摩地。鉢頭迷屹哩○神次は蓮華部心の軌に依る故に、弥陀定印、之を用ふ。この経は正しく金剛部の定印なり>>。

<<諦に観ぜよ。諸法の性は皆自心に由る。煩惱随煩惱。蘊界諸入等。皆幻と焰の如く、健闍婆城の如く、また旋火輪の如く、また空谷の響の如しと。寂滅平等究竟真實智に住す>>。

【注記】 慈雲の連声理解はほぼ正確であるが、時に過度に陥る。仏buddha世lokar界dhātuは逐字訳であるが、「世」が絶対語尾形ではlokaḥであり、hに先立つ母音がa, ā以外の場合、次に有声子音が続くならhはrに変ずる(辻 1974: 21)。もっともこの本文には当てはまらない。「胡麻」はtilaであり、これに「類似」を表すupamaが接続し、a+uでoとなる故、こちらは正確である。

3. 諸仏の驚覺

・(慈雲) tatra khalu pana sarva-tathāgata megha saṃmudaya Sarvārtha-siddha bodhisatva mahāsatva niṣaṇam bodhi maṇḍale gatayāṃ vedana kāyā darśana.

【漢訳】 爾時に一切如来雲集して、一切義成就菩薩摩訶薩の菩提場に坐せるに於て、往詣して受用身を示現し<<他受用身>>。<<この中、一切義成就菩薩菩提場、これ摩竭提の金剛座なり。すなはちこれ始成正覺の式。大日疏の方便ah字門なり。覺鑿上人の言に、法華はこれ大日經の浅略、華嚴はこれ金剛頂の浅略と。初心まさに知るべし。実報土須陀会を動ぜずして、従来穢土変化の化佗に赴く。その最神秘處は更にこれを問へ>>

(堀内) Atha khalu sarva-tathāgatāḥ mahā-samājam āpadya, yena Sarvārtha-siddhir bodhisatvo mahāsatvo bodhi-maṇḍaṇiṣaṅgaṇas tenōpajagmuḥ. upetya bodhisatvasya sām̐bhogikaiḥ kāyair darśanam.

<身十地を証して如実際に住すと想ふ>

【注記】 gatayāṃはgatī「行くこと」の処格をもって「往詣して」を訳したもののか。

・(慈雲) tānāhu, eta vāca kāya, sa putreṇa, kena kārābhi anutra samyaksambodhi ajñāna sarva-tathāgata satyā duṣaccara kṣanta

【漢訳】 咸く是の言を作したまふ、善男子、云何んが無上正等覚菩提を証せんとする。一切如来の眞實を知らずして、諸の苦行を忍ぶや。

(堀内) dattvaivam āhuḥ. “katham kula-putrānuttarāṃ samyaksambodhim abhisambhotsyase, yas tvam sarva-tathāgata-tattvānabhijñatayā sarva-duṣkarāṇy utsahasī?” ’ti.

【注記】 苦行はduṣcara, 忍はkṣantīなど、語尾はともかくとして、慈雲は梵語による仏教用語・熟語を正確に理解している。

4. 五相成身観

・(慈雲) tatra khalu Sarvārtha-siddha bodhisatva mahā-satva<<変化身>> sarva-tathāgata ... āsphānaka-samādhi-to tiṣṭha sarva-tathāgata vandana māmamtrayati sma

【漢訳】 時に一切義成就菩薩摩訶薩、一切如来の警覚によりて、即ち阿娑頗娜伽三摩地に従り起ちて、一切如来を礼し、白して言く、

(堀内) Atha Sarvārtha-siddhir bodhisatvo mahā-sattvaḥ sarva-tathāgatais coditaḥ samānas tataḥ āsphānaka-samādhi-to vyutthāya sarva-tathāgatān prañipaty’āhūyaivam āha:

・(慈雲) bhagava tathāgata śikṣivimāya kena caraya kena satya

【漢訳】 世尊如来、云何が修行せん。云何が是れ眞實なる。

(堀内) “bhagavantas tathāgatāḥ ajñāpayata: ‘katham pratipadyāmi? kīdṛśam tattvam?’” iti.

・(慈雲) eta vācati sma

【漢訳】 是の如く説き已へて、

(堀内) evam ukte

(1) 通達菩提心

・<次に通達菩提心>

<行者驚愕を聞き已へて、身心動揺せず、定中に普礼の眞言を誦し、諸仏を礼して白して言はく、唯だ願はくは諸の如来、わが所行の処を示したまへ>

・(慈雲) sarva-tathāgata pṛthaka mukha samartā paṭha bodhisatvā māmamtrayati sma

【漢訳】 一切如来、異口同音に彼の菩薩に告げて言はく、

(堀内) sarva-tathāgatās taṃ bodhisatvam ekakaṇṭhenaivam āhuḥ:

【注記】 「異口同音」を梵訳してpṛthaka mukha samartāと当てたものと考えられるが、これは「逐字訳」であり、pṛthakaが「異」、mukhaが「口」、samartāは「一致して」である。このような梵訳

の方針は、後述するように、『唐梵雑名千鬘畫引』などの編纂当時から、慈雲によって一貫したものであったと思われる。

・(慈雲) *sutanu, avaloka sva samādhi taṣṭhivyaṃ svabhāva siddha mantrā ... japavyaṃ*

【漢訳】善男子、当に觀察自三摩地に住し、自性成就眞言を以て、自ら恣まに誦すべし。

(堀内) “*pratipadyasva, kulaputra, sva-citta-pratyavekṣaṇa-samādhānena prakṛti-siddhena ruci-japtena mantreṇē!*” `ti:

＜諸仏同音に言く、汝自心を觀ずべしと。既にこの説を聞きおへて、教の如く自心を觀ず。久しく住して諦らかに觀察するに、自心の相を見ず、復た想ひて仏足を礼し、白して言く、最勝尊、われ自心を見ず。この心何の相とか為る。諸仏咸く告げて曰く、心相識量し難し。汝阿字門を想ひ、徹心の明を誦せよ。心を觀ずるに月輪の如し。もし輕霧の中に在るが如し。理の如く諦らかに觀察せよ＞。

【注記】ここにも、慈雲による「逐字訳」の方針が貫かれている。「觀察自三摩地」は、「觀察」が「觀自在菩薩」からの類推により、また「自」は一字として訳して*sva*、これに「三摩地」を付す、という順序である。また *-yam* は願望法能動態 1 人称単数形であり、*japa* は「念誦」である。

・＜眞言に曰く＞

＜唵阿娑嚩賀＞

oṃ citta-prativedhaṃ karomi.

【漢訳】唵質多鉢囉底＜丁以反＞ 微騰迦嚩弭

(2) 修菩提心

・＜次に修菩提心＞

・(慈雲) *tatra khalu bodhisattvā sarva-tathāgatā māmamtrayati sma bhagavaṃ tathāgatā vijñāti bhimāmati sma sva citta dṛśanāmi cakropama*

【漢訳】時に菩薩。一切如来に白して言く、世尊如来、われ遍く知り已んぬ。われ自心を見るに、形月輪の如し。

(堀内) *Atha bodhisattvaḥ sarva-tathāgatān evam āha: “ājñātaṃ me, bhagavantas tathāgatāḥ, sva-hṛdi candra-maṇḍal’ākāraṃ paśyāmi”.*

＜教の如く眞言を誦し、心を觀ずるに満月の如し。輕霧の中に在るが如し。藏識もと染にあらず。清浄にして瑕穢なし。福智を具するが故に、自心満月の如し。復た是の思惟を作さく、是の心何物とか為る。煩惱習種子。善惡皆心に由る。心を阿頼耶と為す。修浄を以て因と為す。六度薰習するが故に、彼の心を大心と為す。藏識もと染にあらず。清浄にして瑕穢なし。長時に福智を積み、喩へば浄満月の如し。体もなくまた事もなし。即ちまた月に非ずと説く。福智を具するによるが故に、自心満月の如し。踊躍の心歡喜す。また諸の世尊に白さく、われ已に自心を見る。清浄にして満月の如し。諸の煩惱の垢の能執所執等を離れたり＞。

【注記】慈雲による連声の理解は正確である。*cakropama*の部分、*cakra + upama*であり、*cakra*は

「車輪」、upamaは「類似」である。

・(慈雲) sarva-tathāgata āhu māmamtrayati sma: sutanu, citta svabhāvārci yogacareṇa anukṛtānulabha śvetavasa yathā kaṣāyānu kaṣāyānu sadha

【漢訳】一切如来咸く告げて言はく、善男子、心の自性の光は、遍く功用を修め、作すに随ひて随ひて獲るが如く、また素衣の色を染めるに、染まるに随ひて随ひて成ずるが如し。

(堀内) sarva-tathāgatāḥ prôcuḥ: “prakṛti-prabhāsvaram idam, kulaputra, cittam. tad yathā parikarmyate tat tathaiva bhavati, tad yathā ‘pi nāma śveta-vastra-rāga-rañjanam” iti.

【注記】「染」の字に、「袈裟」の原語であるkaṣāyāを当てる慈雲の感覚に学びたい。

・(慈雲) tatra khalu sarva-tathāgata svabhāvārcīya citta jñānāya dhānamta tatra māmam tratipa bodhisatva ti sma

【漢訳】時に一切如来、自性の光明の心智を豊盛ならしめんが爲の故に、また彼の菩薩に勅めて言はく、

(堀内) atha sarva-tathāgatāḥ prakṛti-prabhāsvara-citta-jñānasya sphīti-karaṇa-hetoḥ punar api tasmai bodhi-sattvāya,

<諸仏皆告げて言はく、汝が心もとより是の如し。客塵の爲にかくさる所の菩提心は浄と爲る。汝浄月輪を觀ぜよ。菩提心を証するを得ん。この心真言を授く。密かに誦して觀察せよ。真言に曰く>

oṃ bodhicittam utpādayāmi.

【漢訳】唵菩提質多 畝怛波 娜夜弭

・(慈雲) eta svabhāva siddha mantrā bodhicitta mocayati sma

【漢訳】この性成就真言を以て、菩提心を発せしむ。

(堀内) anena prakṛti-siddhena mantreṇa bodhi-cittam utpāditavantaḥ.

<教の如く真言を誦すれば、心月輪をして円満にして益々明顯ならしむ>。

(3) 成金剛心

<次に成金剛心>。

・(慈雲) tatra khalu punapa bodhisatvānu sarva-tathāgata śikṣame bodhicitta utpādayāmi tisma māmam traya tisma mā candra cakra kāye mama yatha candra cakra kāya dṛṣa

【漢訳】時に彼の菩薩、また一切如来に従て依りて旨を承け、菩提心を発し已へてこの言を作す、かの月輪の形の如く、われもまた月輪の形の如く見る。

(堀内) Atha bodhisatvaḥ punar api sarva-tathāgat’ājñāyā bodhicittam utpādayaivam āha: “yat tac candra-maṇḍal’ākāraṃ, tac candra-maṇḍalam eva paśyāmi”.

【注記】√śikṣは「学ぶ」の意であり、「旨を承ける」をこの語で訳した慈雲の語感は鋭い。また「見」の字を活用形のpaśya-系ではなく、語根そのままのdṛśで訳しているのは興味深い。

・(慈雲) sarva-tathāgata māmamtrayati sma tve sarva-tathāgata samanta-bhadra citta utpādayāmi ti vajra dṛdhaye same labha su tiṣṭha eta sarva-tathāgata samanta-bhadrātmadyati sva citta candraye cinta vajra kāya eta mantreṇa.

【漢訳】一切如来告げて言はく、汝已に一切如来の普賢の心を発して金剛の堅固なるに齊等なることを獲得せり。善くこの一切如来の普賢の発心に住し、自心の月輪において金剛の形を思惟せよ。この眞言を以てすべし。

(堀内) sarva-tathāgatāḥ āhuḥ: “sarva-tathāgata-hṛdayam te samanta-bhadraś cittōtpādaḥ sāmīci-bhūtaḥ. tat sādhu pratipadya ... sarva-tathāta-samanta-bhadra-cittōtpādasya dṛdhī-karaṇa-hetoḥ sva-hṛdi candra-maṇḍale vajra-bimbaṃ cintayānena mantreṇa”.

<諸仏、また告げて言く、菩提を堅固と為し、また心眞言を授け、金剛蓮華を觀ぜしむ。即ち心月輪の上に八葉の妙蓮華有りト>。眞言を誦して曰く<<神岡次第は蓮華部心の軌を写すが故に、妙蓮と云ふなり>>。

【注記】「堅固」は、現在の英梵辞典にも dṛdha とあって参考になる。サンスクリットがインドの公用語の一つとして現役で用いられていることはまことに意義深い。一方、「獲得」は、印欧語共通語基√labh から明らかなように(ギリシア語 λαμβάνειν)、bh 字のはずであるが、慈雲、長谷宝秀師とも一貫してこれを dh 字で写しており、誤記かと思われる。

oṃ tiṣṭha vajra. <<加持金剛なり>>

【漢訳】唵底瑟姪囉日囉<<神次鉢娜麼之一句有り。已下神次を略す>>

・(慈雲) bodhisatva māmamtrayati sma: bhagavaṃ tathāgata candra cakra vajra dṛśami

【漢訳】菩薩白して言く、世尊如来、われ月輪の中の金剛を見る。

(堀内) bodhisatvaḥ āha: “paśyāmi, bhagavantas tathāgatāś, candra-maṇḍale vajram”.

(4) 証金剛身

<次に証金剛身>

・(慈雲) sarva-tathāgata āhu mamtrayati sma: sarva-tathāgata samanta bhadra citta vajra dṛdhāya eta mantreṇā

【漢訳】一切如来、咸く告げて言はく、一切如来の普賢の心の金剛を堅固ならしむるに、この眞言をもってせよ。

(堀内) sarva-tathāgatāḥ āhuḥ: “dṛdhī-kurv idaṃ sarva-tathāgata-samanta-bhadra-citta-vajramanena mantreṇa:

oṃ vajr’ātmako ’ham. <<金剛身我>>

【漢訳】唵囉日囉怛麼俱唎

[金剛名灌頂]

・(慈雲) yāvata keci sarvākāśa dhanavi. parṇana sarva-tathāgata kāyatu vāca manena vajradhātu sarva-tathāgatādhiṣṭhānādhiṣṭhine āhu praviśa satvavajra

【漢訳】あらゆる一切虚空界に遍満せる一切如来の身口心の金剛界、一切如来の加持を以て、悉く薩埵金剛に入る。

(堀内) Atha yāvantaḥ sarv'ākāśa-dhātu-samavasaraṇāḥ sarva-tathāgata-kāya-vāk-citta-vajra-dhātavas, te sarve sarva-tathāgatādhiṣṭhānena tasmin sattva-vajre praviṣṭāḥ

【注記】この冒頭、「所有」(あらゆる)という語に関して、慈雲は明らかに『普賢行願讃』の冒頭(yāvanta kecid「所有一切世界中」)に依拠して梵訳を行っている。すなわち慈雲は、漢字語彙単位で対応する梵語語彙を探索し、これを『教王経』の梵訳にも当てはめているものと思われる。

・(慈雲) ste sarva-tathāgata Sarvārtha-siddha bodhisatva mahāsatve vajra nāmeṇa nāmana vajradhātu vajradhātavābhiṣekai.

【漢訳】則ち一切如来、一切義成就菩薩摩訶薩において金剛の名を以て金剛界と號し、金剛界の灌頂をなしたまふ。

(堀内) tataḥ sarva-tathāgatāḥ sa bhagavān Sarvārtha-siddhir mahā-bodhisattvo “Vajra-dhātur Vajra-dhātur” iti vajra-nāmā bhiṣekeṇābhiṣiktaḥ.

【注記】「灌頂」abhiṣekaなど、術語レベルで慈雲の脳裏に刻み込まれている梵語語彙が梵訳の際に活用されていることについては、改めて思いを致してよいだろう。またdhātu「界」のおそらく処格としてdhātauを出し、abhiṣekaiとの連声によりdhātavābhi-と綴る慈雲の連声理解の正確さについても、改めて注目してよいだろう。

(5) 仏身円満

<次に仏身円満>≪金剛界の称、因果に通じ、身土を撰す。自らこれ甚深細灌頂の儀。これを梵文に照らさば、則ち三世に亘り、十世をかねて玄のまた玄衆妙の門なり。薩埵金剛出入無際。三世を超えたる如来の加持力なり≫。

・(慈雲) tatra khalu vajradhātu bodhisatva mahāsatva ste sarva-tathāgata māmamtrayati sma: bhagavaṃ tathāgata, sarva-tathāgatā mama kāyati.

【漢訳】時に金剛界の菩薩摩訶薩、彼の一切如来に白して言く、世尊如来、われ一切如来は自身為りと見る。

(堀内) Atha Vajra-dhātur mahā-bodhisattvas tām sarva-tathāgatām evam āha: “paśyāmi, bhagavantas tathāgatāḥ, sarva-tathāgata-kāyam ātmānam”.

【注記】この箇所、慈雲のこれまでの方針から言えば、遂字訳を施しているはずであるが、それならkāyatiは「為」の字のはずである。するとこの部分には「見」の字に対する訳語が欠落しているように思われる。

・(慈雲) sarva-tathāgata punar mamtrayati sma, tena kāraṇena mahāsatva sarvasatvavajra ākaravati sarvakāya sadhana avalokane svakāyevai buddhikāya eta svabhāva sadhamantrenā numana sa japam

【漢訳】一切如来また告げて言はく、この故に摩訶薩、一切の薩埵金剛は、一切の形を成就して具せり。自身の仏形を觀じ、この自性成就の眞言を以て、意に隨つて誦すべし。

(堀内) sarva-tathāgatāḥ prāhuḥ: “tena hi mahā-satva, sarva-vajraṃ sarv’ākāra-varōpetam buddha-bimbam ātmānam bhāvayā. ‘nena prakṛti-siddhena mantrēṇa rucitaḥ parijāpya,

【注記】慈雲は一貫して、「告げて曰く」式の定式句に対しmaṃtrayati smaの句を用いて梵訳している。現今のサンスクリット学では√mantrは「相談する」「忠告する」といった意味合いで用いられる。なおsmaは、「現在時制に過去の意味を与える」(平岡 2005: 699)とされ、仏典には頻用されるようである。kāraṇenaはkāraṇa「理由」の具格であり、具格に関して、意味・格形とも、慈雲の理解は正確である。

om yathā sarva-tathāgatās tathā ’ham.《彼の一切如来の如く、これ我なり》。

【漢訳】俺也他薩婆怛他誡多薩怛他哈(※慈雲のテキストには掲載されていない)

5. 三十七尊出生

(1) 諸仏加持

・(慈雲) eta vācati sma vajradhātu bodhisatva mahāsatva bhisva bhavakāya tathāgatā bhūvandana sarvatathāgata ti sma: praṇidhāna bhagavaṃs tathāgatebhi adhiṣṭhāmama etābhisambodhi dṛdhana

【漢訳】この言を作し已て、金剛界の菩薩摩訶薩、自身の如来を現証し、盡く一切如来を礼し已て、白して言く、唯し願くは世尊、諸の如来われを加持し、この現証の菩提をして堅固ならしめたまへ。

(堀内) Athaivam ukte Vajra-dhātur mahā-bodhisatvas tathāgatam ātmānam abhisambudhya tām sarva-tathāgatān praṇipaty’āhūyavim āha: “adhitiṣṭhata mām, bhagavantas tathāgatāḥ, imām abhisambodhiṃ dṛḍhī-kuruta cē” ‘ti.

【注記】「現証」の語は、『密教大辞典』(密教辞典編纂会 1931)ではvisambodhiと綴るが、堀内本はabhisambodhiを出しており、この語彙を用いる慈雲の理解は原典に合致する。bhisva bhavakāyaの部分、「自身の如来を現証し」に当たるので、このabhisambodhiを用いたところかもしれない。

・(慈雲) mamaṃtrayati sma: s-tathāgatāveśana vajradhātu tathāgata sta satva vajrāyaṃ

【漢訳】この語を作し已て、一切如来金剛界の如来の《已来これ如来の号》、彼の薩埵金剛の中に入る《広金剛の義ここに見る》。

(堀内) Athaivam ukte sarva-tathāgatāḥ Vajra-dhātus tathāgatasya tasmin sattva-vajre praviṣṭāḥ iti.

(2) 五智円成

・(慈雲) tatra khalu bhagavaṃ vajradhātu 《如来》 sta kṣaṇatayām

【漢訳】時に世尊金剛界の如来、刹那の頃に当たりて

(堀内) Atha bhagavān Vajra-dhātus tathāgatasya tasminn eva kṣaṇe

- (慈雲) abhisambodhi sarvatathāgata samajñāna ≪東方≫
【漢訳】 等覚一切如来平等智を現証し、
(堀内) sarva-tathāgata-samatā-jñānābhisambuddhaḥ
- (慈雲) sarva-tathāgata samajñāna ≪南方≫
【漢訳】 一切如来平等智三昧耶に入り、
(堀内) sarva-tathāgata-samatā-jñāna-mudrā-guhyā-samaya-praviṣṭaḥ
- (慈雲) samayāpadhinābhi sarvatathāgatā ≪西方≫
【漢訳】 一切如来法平等智の自性清浄を証し、
(堀内) sarva-tathāgata-dharma-samatā-jñānādhigama-svabhāva-śuddhaḥ
- (慈雲) dharma samajñāna svabha sarva-tathāgata bodhisatvā
【漢訳】 則ち一切如来平等自性光明智藏
(堀内) sarva-tathāgata-sarva-samatā-prakṛti-prabhāsvara-jñān'ākara-bhūtas
- (慈雲) sarva-tathāgata ≪北方≫ sama svabha vārci
【漢訳】 如来應供正遍知を成す。
(堀内) tathāgato 'rhan samyaksambuddhaḥ samvṛttaḥ iti.

(3) 宝灌頂

• (慈雲) tatra khalu sarva-tathāgata punaraṃ sarva-tathāgata satvavajra tadyasyana ākāśagarbha mahāmaṇi ratnābhiṣikite avalokiteśvara dharma jñāna utmadyate sarva-tathāgatesvarakarma dhiyati yāpayati

【漢訳】 時に一切如来、また一切如来薩埵金剛より出でたまふ。虚空藏大摩尼宝を以て灌頂し、觀自在法智を発生し、一切如来毘首羯磨を安立し、

(堀内) Atha sarva-tathāgatāḥ punar api tataḥ sarva-tathāgata-sattva-vajrān niḥsṛty' ākāśa-garbha-mahāmaṇi-ratnābhiṣekeṇābhiṣicyāvalokiteśvara-dharma-jñānam utpādyā, sarva-tathāgata-viśva-karma-tāyāṃ pratiṣṭhāpya,

<これを須弥頂因陀羅座と云ふなり>

- (慈雲) yena sumeruṣiṣa vajra-maṇi-ratna-kūṭa vīmanayegatāya
【漢訳】 これに由りて須弥盧頂の金剛摩尼宝峯樓閣に往詣し、
(堀内) yena Sumeru-giri-mūrdhā, yena ca vajra-maṇi-ratna-śikhara-kūṭāgarās, tenōpasamkrāntāḥ.
- (慈雲) gana smati vajradhātu tathāgata sarva-tathāgata tiṣṭhāna sarva-tathāgata simhāviri sarvamukha mukṣāśācche
【漢訳】 至り已て金剛界の如来、一切如来の加持を以て、一切如来の師子座に於て一切の面に安立したまふ≪これはこれ加持の跡≫。
(堀内) upasamkramya Vajra-dhātum tathāgatam sarva-tathāgata-tve 'dhiṣṭāya, sarva-tathāgata-simh'āsane sarva-to mukham pratiṣṭhāpayām āsur it.

(4) 四方如来の会座

・(慈雲) tatra khalu akṣobhyas tathāgata ratnajatas tathāgata avalokiteśvararājas tathāgata amoghasiddhis tathāgata sarva-tathāgatāya tiṣṭhāna svakāya

【漢訳】時に不動如来と、宝生如来と、観自在王如来と、不空成就如来との一切如来、一切如来の自身を加持したまふを以て、

(堀内) Atha khalu Akṣobhyas tathāgato, Ratna-saṃbhavaś ca tathāgato, Lokeśvara-rājaś ca tathāgato, ‘Mogha-siddhiś ca tathāgataḥ, sarva-tathāgata-tvaṃ svayam ātmany adhiṣṭhāya

<この中三身の名、相明歴歴。上に一切面と云ひ、ここに観察四方と云ふ。その義別ならず。金剛界の如来と釈迦牟尼と、各々の三身互融無際なり><<更にこれを問へ>>。

(5) 五方如来出生

・(慈雲) bhagavaṃ Śākyamuni-tathāgata sarva samasu ... ta sarvadaśa avalokite caturadana niṣṭhāna

【漢訳】娑伽梵釋迦牟尼如来、一切平等に善く通達したまふが故に、一切法を平等に観察し、四方にしかも坐したまふ。

(堀内) bhagavataḥ Śākya-munes tathāgatasya sarva-samatā-suprativedhatvāt sarva-dik-samatām adhyālambya catasṛṣu dikṣu niṣaṇṇāḥ.

<第八識を転じて大円鏡智と為す>

【注記】唯識で説かれた「八識説」に対し、第九識たる「菴摩羅識」を加え、これを「法界体性智」また主尊の大日如来に当てはめ、これを基点として、そこに至るまでの八識（第八識、第七識、第六識、前五識）を順に転識得智するのが密教の主眼である。以降、そのプロセスが始まる。

・(慈雲) tatra khalu bhagavaṃ vairocana tathāgata acireṇābhisambodhi sarva-tathāgata samantabhadrā citta

【漢訳】爾時に世尊毘盧遮那如来、久からずして等覺一切如来の普賢心を現証し、

(堀内) Atha bhagavān Vairocanas tathāgato ‘cirābhisambuddhaḥ sarva-tathāgata-samanta-bhadra-hṛdayaḥ

・(慈雲) sarva-tathāgatākāśātiṣṭha mahāmaṇi abhiṣikine labhana

<第七識を転じて平等性智と為す>

【漢訳】一切如来虚空發生大摩尼宝灌頂を獲得し、

(堀内) sarva-tathāgat’ākāśa-saṃbhava-mahā-maṇi-ratnābhiṣekeṇābhiṣiktaḥ

・(慈雲) sarva-tathāgatāvalokiteśvara dharma jñāna pāramita labhana

<第六識を転じて妙観察智と為す>

【漢訳】一切如来観自在法智彼岸と

(堀内) sarva-tathāgatāvalokiteśvara-dharma-jñāna-parama-pārami-prāptaḥ

【注記】慈雲は『般若心経』の訳語を想起してpāramitaを出したものであろう。

・(慈雲) sarva-tathāgateśvarakarma amogha aparajita āgama paripurṇa karma paripurṇāśa

<前五識を転じて成所作智と為す>

【漢訳】一切如来毘首羯磨不空無礙教、円満事業、円满意楽とを得。

(堀内) sarva-tathāgata-viśva-karmatā`moghāpratihata-śāsanah paripūrṇa-kāryah paripūrṇa-manorathah

【注記】 tathāgata + iśvaraがtathāgateśvaraとなるとする慈雲の連声理解は正確である。

(6) 十六大菩薩の出生 ～金剛薩埵～

・(慈雲) sarva-tathāgata satma svatiṣṭha ste aveśa sarva-tathāgata samantabhadra mahābodhisatva samaye darśana satvatiṣṭha vajrasamādhi

【漢訳】一切如来の性を、自身に於て加持し、即ち一切如来の普賢摩訶菩提薩埵の三昧耶に入り、薩埵加持の金剛三摩地を出生したまふ。

(堀内) sarva-tathāgata-tvaṃ svayam ātmany adhiṣṭāya, sarva-tathāgata-samanta-bhadra-mahā-bodhi-sattva-samaya-saṃbhava-satvādhiṣṭhāna-vajraṃ nāma samādhiṃ samāpadyēdam

・(慈雲) sarva-tathāgata mahāyānābhisamaya sarva-tathāgata citta nāma svacittanābhinirahari vajrasatva

【漢訳】一切如来の大乗現証の三昧耶なり。一切如来心と名づく。自心より嚩日羅薩怛嚩を出したまふ。

(堀内) sarva-tathāgata-mahā-yānābhisamayam nāma sarva-tathāgata-hṛdayam sva-hṛdayān niścacāra: “vajra-satva”

【注記】 abhi-ni-rahariの部分、読みに関して不詳であるが、√rah (離す) に帰すものであろうか。

【注記】 これ以降は慈雲による梵訳文が載っておらず、不空の漢訳文のみが載り、これに慈雲が注記を施している。ここで慈雲が梵訳を放棄したものと思われる。本稿ではこの漢訳文に、堀内師によるサンスクリット校訂原文を併記しておく。

【漢訳】 わずかに一切如来心を出して《自受用》

(堀内) Athāsmiṃ viniṣṭāya sarva-tathāgata-hṛdayebhyaḥ

【漢訳】 即ち彼の婆伽梵普賢《自性身》、衆多の月輪と為して《徧一切処》、普く一切有情の大菩提心を浄めたまふ《已心現一切有情》。

(堀内) sa eva bhagavān Samanta-bhadraś candra-maṇḍalāni bhūtvā viniṣṭāya sarva-satvānāṃ mahā-bodhi-cittāni saṃśodhya

【漢訳】 諸仏のみもとに於て周廻して住したまふ《支分生曼荼》。

(堀内) sarva-tathāgatānāṃ sarva-pārśveṣv avasthi.

【漢訳】 彼の衆多の月輪より《自性輪》

(堀内) atha tebhyaś candra-maṇḍalebhyaḥ

【漢訳】 一切如来の智金剛を出して《正法輪》

(堀内) sarva-tathāgata-jñāna-vajrāṇi viniṣṭāya,

【漢訳】 即ち婆伽梵毘盧遮那如来の心に入りたまふ《自性輪の位》。

(堀内) bhagavato Vairocanasya tathāgatasya hṛdaye praviṣṭāni.

III. 『教王経初品』をめぐる考察

1. 「還梵」の特性

以上、慈雲による「還梵」の実態を探るべく、『教王経初品』の全文を翻刻した。当該作品は、全集版で364頁から377頁に及ぶ14頁ばかりの小作品に過ぎないが、真言密教の教説の中核を形成するテキストへの、慈雲自身による梵訳を含めた注疏であり、重要性は高い。慈雲は最晩年の一時期、「五相成身観」の典拠となるこの『金剛頂経』に対する梵訳を試みることで、築き上げられた梵学の伝承を、遺される弟子たちに伝えるばかりでなく、その梵訳文が、高貴寺一派にとって念誦次第の原典としても活用されることを願った。それまで真言宗では、当然のことながら、陀羅尼部分のみを梵語で唱え、それ以外は不空の漢訳文をもって依経としていた。これに対し、慈雲は自らの梵訳した『金剛頂経』本文を以て、念誦次第の基本テキストとして定めたのである。

上に掲げた翻刻から明らかなように、サンスクリット原文で伝えられていた陀羅尼については、玄奘(602-664年)に由来する「五種不翻」の原則の1つが適用されることにより(漢字音写によるとは言え)、『金剛頂経』の原文が発見される以前から正確に伝えられてきた。慈雲は、サンスクリットで記された『金剛頂経』の原文についても、これを原語レベルに「環梵」しようとしたわけである。そしてさらにわれわれとしては、本稿の前半で注意を喚起したように、真言宗に多様を極める形で伝わる「法流」に基づく「次第」を、慈雲は『金剛頂経』という経文そのものに帰着させようと試みたのではなかったか、と考えてみたい。

以下、慈雲による梵訳の特徴をいくつかの点にまとめておきたい。

- ・漢「語彙」ではなく、漢「字」レベルでの「逐字」梵訳に徹している。
- ・一方語順としては、訓読和文の語順に梵語を並べることを企図している箇所が多い。
- ・連声の理解はほぼ正確であり、時に正確にすぎる意識が認められる。
- ・avalokitesvaraなどにおける l 字と r 字の混同、およびマントラ(真言)を「ヴァントラ」と写すなどの混乱が一貫して見られる(本文における翻刻文では修正済み)。

指摘するまでもないことだが、慈雲による梵訳文は、後世発見された『金剛頂経』の本文とは、語順・構文のレベルばかりでなく、語彙のレベルでも一致していない場合が多い。構文のレベルでは、動詞の活用体系、および名詞類格変化体系をめぐる慈雲の理解は不正確であり、動詞なら3人称単数形のみ、名詞類なら斜格のうち具格のみといった具合に、部分的なレベルでの理解に留まっている。したがって、慈雲の梵訳文だけでは原文の正確な意味を把握し難い場合が多い。ただ漢文およびその訓読文と併せて慈雲の梵訳文を読むならば、原文の正確な理解に及び得よう。

また「注記」の際に既述したように、特に漢「字」レベルでの個々の語彙概念の訳語を検討してみるならば、それらは(すでに)いずれかの経文の類に先例を求め得る用語・概念で満たされている。慈雲の時代が鎖国の江戸期であったことを考えるなら、音声レベルでの梵語をめぐる情

報はまず入手不可能であり、われわれが容易に音声レベルでの外国語情報に接しうる環境にあるのと比べれば、天と地ほどの差がある。慈雲の梵語力は、文書レベルで培われたものなのである。

このように、慈雲による梵語理解が文書レベルで進められたということから、彼の梵語把握はすべて「視覚」レベルで行われているものと推測される。慈雲は不空の漢訳文を頼りに、漢訳テキストを、意識の上では最終的に“漢「字」の集積体”であるというレベルにまで凝集させ、各々の漢「字」に対応する梵語語彙を順次当てはめつつ、梵訳文を仕上げていったものと推測される。

2. 「環梵」に至るまでの経緯

さて、前項で慈雲の「梵訳」プロセスが少しく明らかになったものと思われるが、本学筑波大学には、幸いにしてこのような慈雲の営為の成立過程を推察させる文献資料が、『梵学津梁』関連の資料として約30点所蔵されている。それらはほぼ、2010年度に開催された筑波大学附属図書館秋季特別展「慈雲尊者と悉曇学—『法華陀羅尼略解』と「梵学津梁」の世界—」において公開することができた（秋山2010）。以下、そのうちのいくつかを挙げてみることにしたい。

(1) 『梵学津梁略詮阿字部』（略詮第五之一；チ590-10）

慈雲は、梵字悉曇学研鑽のアーカイヴとも言える『梵学津梁』（全1千巻とされる）の全容を、1770年（53歳ごろ）当時にはすでに完成させていたものと考えられる。この『梵学津梁』の中核部分を成すべき梵語辞典に相当するものがこの「略詮」部門に分類されるのであるが、本学にはこの「略詮阿字部」の慈雲直筆本が所蔵されている。この作品は、梵字の第1字・a字に対して、まず音写のために用いられた漢字が「阿」から順次横に並べられ、各字を充てた訳者・経書・辞書等の典拠がその下に示された後、「二字門」へと続き、梵字二字より成り一字目がaの語彙が横に並べられ、釈語がその下に示されて典拠も併せ明示される、という手順で記述が進められてゆく。おそらくこのような作業は、尼僧を含めた精鋭の弟子たちより成る「慈雲シュール」の行として進められ、後には漢字画数による逆引き辞典の作成へと結晶されてゆき、本稿で取り上げた『理趣経講義』など最晩年の著作における「環梵」作業に資するツールとなったものであろう。

(2) 『法華陀羅尼諸訳互証』（ハ320-58）

「略詮阿字部」と同様、慈雲がまず入手可能な限りでの梵本を探索し、漢訳語（字）彙と梵本原文との対応関係を探ろうとした労作に、「諸訳互証」と呼ばれる形式のものがある。

慈雲にとって梵本原典で入手しえた経典は、空海の請来になる「梵字真言集」（全42部44巻）を除けば、『般若心経』『阿弥陀経』『普賢行願讃』の3点に限られる。これらは「梵篋三本」と呼ばれ、3点あわせて天明3（1783）年に校本の形で公刊された。2004年の「慈雲尊者200回遠忌」を期にその複製本が作成されている。これら「梵篋三本」は、梵字による横書きの本文に対し、行間に漢字による該当箇所訳語が付されるという形式を採用（『般若心経』および『阿弥陀経』については、それぞれ岩波文庫版冒頭に写真版が付されている）。慈雲はこれら「梵篋三本」に

ついて、いずれも「諸訳互証」と呼ばれる形式での注疏を遺している。それらは、当該三経に対して漢訳が複数種類存在することから、まず梵文原典を掲示した後、漢訳文を訳者名とともに順次提示し、最終的には原文のどの箇所にもどの漢訳語が対応するか、を見定めて指示したものである。

この「諸訳互証」の形式は、本学に慈雲直筆の形で所蔵される『法華陀羅尼略解』（ハ320-59）の原テキストである「法華経陀羅尼」に対しても採られている。「法華経陀羅尼」は「陀羅尼」であるため、「五種不翻」の原則が貫かれるならば翻訳の対象とはならないはずである。しかしながら慈雲は、竺法護による『正法華経』など陀羅尼の意識を載せたものを収集し、この「法華経陀羅尼」に対しても「諸訳互証」を施している。このように、可能な限り既存訳を比較対照し記録することにより、慈雲は、梵文による観想への収斂を目指してその後半生を歩んでいたのである。

(3) 『唐梵雑名千鬘畫引』(チ590-18)

この作品は、『唐梵文字』(チ590-5)、『梵語雑名』(チ425-4)、および『梵語千字文』(本学附属図書館には非所蔵)という、梵語語彙に対して漢訳語を付した3作品について、その各編に見られる語釈漢字を一字ずつ総画数順に配列し、その掲載頁を略字と頁数によって示した「画引き漢梵辞典」である。慈雲シュールにあっては、「意味」の世界がすべて、漢字一文字を単位・基準として脳裏に留められていたということをおぼろげにうかがわせる労作である。

本稿で取り上げた『教王経初品』でも、慈雲の梵訳の基準が、漢字一文字一文字を単位になされていることを推測させる箇所がいくつか散見され、この『千鬘畫引』との関連性が示唆された。

(4) 『五十字門説』(チ590-1)

梵字字母の順序に倣い、日本語の50音それぞれの字を神道流に意義づけようとした作品である。悉曇学においては、「42字門」に対し「50字門」が異なる世界観を提示するものとして既存したが、慈雲はこれとは別に、神道に根差した「五十字門」を打ち立てようとしたと考えられる。慈雲は、崇敬する明忍律師(1576-1610年)への春日大社の神託「戒は十善、神道は句々の教え」を心に刻み、律行・密道を深めただけでなく、遂に雲伝神道の樹立に至る。最終的には、神道を真に究めるためには密教が不可欠であるという立場に達し、神仏両道の一致を模索していた。

『教王経初品』にも、おそらくはこのような慈雲の神道観が表れているのではないかと思われる。その論拠として挙げられうるのが、梵訳が漢字単位で行われる一方、梵訳文の語順については、これを訓読した和文のものに一致させようとする傾向である。語彙の梵訳が漢字単位で行われているのが特徴的であるだけに、逆にこの語順レベルでの和文の意識は著しいと言ってよい。

IV. 結

慈雲が江戸時代末期、19世紀初頭に行った「梵訳」は、「環梵」すなわち原典再建のための大きな試みであったと同時に、日本語から印欧語に向けての「作文」の一つとして、現代に生きるわれわれにも個性的な指針を与えてくれる。慈雲の試みは、『金剛頂経』のサンスクリット原典が発見された後となつては、一見するとまったく意味の乏しい「習作」のように見えるかも知れない。しかしながら本稿で検討してきたように、慈雲の梵訳文は、原典梵文とは甚だしく異なるものであるだけに、逆にそこには、慈雲一流の一貫した主義主張を認めることが可能であった。それはすでに、作文の出来・不出来・文法上の正確さなどといった価値基準をはるかに超えたものであり、言うまでもなく「慈雲一派」の立脚点として有用な基盤テキストを形成しうるのであった。われわれは将来に向けての外国語教育の中で、印欧語への訳業をめぐって行われた慈雲のメッセージを、いかばかりか伝えてゆくことができるのではないだろうか。

参考文献

- 秋山学 2010『慈雲尊者と悉曇学—『法華陀羅尼略解』と「梵学津梁」の世界—』筑波大学。
—— 2018a『律から密へ 晩年の慈雲尊者』春風社。
—— 2018b「『金剛頂瑜伽十八会指帰』『一切義成就品』の品題をめぐる一考察」『文藝言語研究』74巻、1-25頁。
- 上田靈城 1997「三宝院流憲深方四度次第」『長谷寶秀全集 第6巻』378-396頁、法蔵館。
遠藤祐純 1985『金剛頂経入門 上巻』（智山教化資料第13集）真言宗智山派宗務庁。
高見寛応 1964「理趣経講義」小野玄妙編『仏書解説大辞典』、大東出版社。
辻直四郎 1974『サンスクリット文法』岩波全書。
梶尾祥雲 1982『秘密事相の研究』高野山大学密教文化研究所。
長谷宝秀編 1926『慈雲尊者全集』全19巻、思文閣出版。
平岡昇修 2005『初心者のためのサンスクリット辞典』世界聖典刊行協会。
堀内寛仁 1973『梵蔵漢対照 初会金剛頂経の研究 梵本校訂篇』高野山密教文化研究所。
前田弘隆監修 2008-2010『梵学津梁：高貴寺蔵書リスト』高貴寺。
密教辞典編纂会 1931『密教大辞典』法蔵館。